

すべては福音のために

コリント人への手紙第一 9章 19-27節

はじめに

使徒パウロは、小アジアやヨーロッパにキリスト教を広めました。彼はどのようにキリスト教を広めたのでしょうか？それは、「福音」というものを宣べ伝えることによってです。

1. 人を救う「福音」

今日の聖書箇所を見ると、「福音」は人を救うものであることが分かります。「福音」は、「良い知らせ」（Good News）という意味ですが、福音には人を救う喜びのメッセージがあるのです。

第一に、福音は、私たちが罪の力から救います。生まれながらの人間は誰でも、神から離れて生きています。神を信じず、神に従わずに生きています。そのため、神は人間を罪の力に引き渡されたのです。その結果、人間の社会の中には、偶像礼拝や性的な乱れ、ねたみ、殺人、争い、嘘、憎しみ、高ぶり、家庭の崩壊が起こって来たのです。

しかし神は、この罪の力から私たちが救うために、イエス・キリストをこの世に遣わされました。私たちは、自分では自分を救えないことを認め、イエス・キリストを救い主と信じ、イエス・キリストの力に委ねていく時、神と和解し、罪の力から救われるのです。もちろん罪の力との戦いは、生涯にわたって続きますが、イエス・キリストを信じる者に与えられる聖霊の助けによって、罪に打ち勝って生きることができるのです。

第二に、福音は、私たちが死の恐怖と神の裁きから救います。私たち人間は、いつか必ず死ななければなりません。死は、人間の罪の結果であると聖書は教えます。しかし死は決して終わりではありません。死によって私たちの存在がなくなるわけではありません。私たちは誰でも、死後に神から裁きを受けるのです。そして天国か地獄か、いずれかに私たちの魂は行くこととなります。もし私たちが、自分の罪を認め、イエス・キリストを救い主と信じるなら、神の裁きから救われ、天国に行くことができるのです。イエス・キリストを信じる者にとって、死は天国への入口となるのです。天国は、神とイエス・キリストがおられる所であり、一切の労苦から解放されて、安らぎに包まれる所です。

このように福音は、私たちが救うメッセージです。しかし福音は、ただ聞くだけでは私たちが救いません。私たちが福音に応答しなければ、私たちが救うものにはなりません。私たちは、福音を信じなければなりません。心を開き、イエス・キリストに自分の人生を

委ねなければなりません。自分の口で信仰を告白しなければなりません。その時に初めて、福音は、「良い知らせ」、私たちを救う喜びのメッセージとなるのです。

2. 福音のためなら何でもする

このように福音は、私たちが罪の力と死の恐怖、また神の裁きから救う喜びのメッセージです。パウロは、一人でも多くの人にこの福音を伝えたいと思いました。また一人でも多くの人を、この福音によって救いたいと思いました。

パウロは、福音によって人々を救うためには、何でもしました。律法の下にあるユダヤ人を救うためには、ユダヤ人のように律法を守りました。また律法を持たない異邦人を救うためには、異邦人のように律法に縛られずに生活しました。弱い人たち、つまり信仰の弱い人たちを救うためには、弱い人たちを思いやり、自分の当然の権利を放棄しました。

パウロは、人々が救われるためには、自分のあり方をいくらでも変えたのです。自分の権利やこだわりを捨てたのです。誰のようにでもなったのです。パウロにとって一番大切なことは、人々が救われることだったのです。人々が救われるためには、どんな努力も、どんな犠牲も惜しまなかったのです。

福音は、私たち人間にとって重大なメッセージです。人が罪の力から、また死の恐怖と神の裁きから救われるかどうかに関わる重大なメッセージです。私たちは、この福音を伝え、人々を救わなければなりません。イエス・キリストは、私たち教会に、このメッセージを委ねておられるのです。私たちが伝えなかったなら、人々は救われないのです。

私たちは何とかして、この福音のメッセージを人々に伝えなければなりません。福音を伝えるためには、福音を伝える土壌を作らなければなりません。ただ頭ごなしに、一方的に福音を伝えても、人々は心を開きません。私たちは人々と信頼関係を築かなければなりません。そのために、人々の文化を理解し、可能な限り彼らの文化に合わせなければなりません。

私たちは、福音のメッセージを伝えるという目的と福音のメッセージの内容を変えてはいけません。しかし福音の伝え方は、伝える人々によって変える必要があるのです。日本人には日本人のように、韓国人には韓国人のように、都会の人には都会の人のように、地方の人には地方の人のように、高齢者には高齢者のように、子どもには子どものように、若者には若者のように、主婦には主婦のように、サラリーマンにはサラリーマンのようになり、それぞれの文化を理解し、可能な限り彼らの文化に合わせ、福音を伝えなければなりません。人々を救うためには、福音を伝える土壌を作る努力と犠牲が必要なのです。

3. キリストの律法を守っている

しかし私たちは、福音を伝えるために、可能な限り人々の文化に合わせていく時、あらゆる誘惑と隣り合わせであることも覚えていなければなりません。私たちは、人々の文化

に合わせていく時に、いつの間にか世の中に流されてしまうということが起こり得るのです。ミイラ取りがミイラになってしまうことがあるのです。

パウロも、律法を持たない人たちを救うために、律法を持たない人のようになりました。その時には当然、パウロも誘惑と隣り合わせであったのです。しかしパウロは、そのような中でも、21 節にあるように「**キリストの律法**」を守り、そこから決して離れなかったのです。

私たちは、福音を効果的に伝えるために、可能な限り人々の文化に合わせていく必要があります。しかしその時に私たちは、「キリストの律法」からは決して離れてはならないのです。「キリストの律法」に反することにまで私たちが合わせていくと、私たちはいつの間には世の中に流されてしまうのです。

パウロは、20 節にあるように、「**私自身は律法の下にはいません**」と言っています。私たちクリスチャンも、もはや律法の下にはいません。ユダヤ人たちは、律法を守ることによって救われると考えていました。しかし、私たちはイエス・キリストを信じることによって救われたのです。ですから私たちは、救われるために律法を守ることはしません。その意味で私たちは、律法から自由になっています。

では私たちは、律法を守らなくてよいのでしょうか？そうではありません。確かに私たちは、旧約聖書に書かれている動物のいけにえなどの儀式的律法を守る必要はありません。それらは皆、イエス・キリストを指し示すものでした。イエス・キリストが十字架で御自身をいけにえとして捧げてくださった今は、もはや私たちは動物のいけにえなどの儀式的律法を守る必要はなくなりました。しかし私たちは、「十戒」に書かれている道德に関する律法は守らなければなりません。偶像礼拝をせず、神だけを礼拝する、安息日を守る、神への誓いを果たす、親を敬い、盗み、姦淫、殺人、嘘、妬みをしてはならない、この神を愛し、隣人を愛するという律法を守らなければなりません。

私たちは、救われるために律法を守ることはしません。救われたから律法を守るのです。神に愛されるために律法を守るではありません。神に愛されたから律法を守るのです。私たちは、イエス・キリストを通して、神に愛され救われました。私たちは、その感謝と喜びから、また神への愛の現れとして律法を守るのです。これが「キリストの律法」です。

私たちは、世の人々に福音を伝え救うために、世の中に入っていかなければなりません。世の人々と共に生き、信頼関係を築かなければなりません。しかし私たちは決して、「キリストの律法」から離れてはならないのです。

4. 信仰の失格者にならないために努力している

パウロは熱心に福音を伝えました。それは、一人でも多くの人を救うためです。しかしパウロには、熱心に福音を伝えるもう一つの理由がありました。それは、23 節にあるように、「**福音の恵みをともしに受ける者となるため**」です。それは、27 節にあるように、信仰の「失

格者」にならないためです。

パウロのような偉大な伝道者でさえ、自分が信仰の失格者になるかもしれないという危機感を持っていたのです。つまり生涯の最後まで、天国に行くまで、信仰を守り通せないかもしれないという危機感を持っていたのです。

パウロは24節以下で、クリスチャンを、運動競技をする選手（アスリート）に譬えています。アスリートは、賞を得る（金メダルを獲る、優勝する）という目標を持ち、それに向けて毎日練習し、筋肉トレーニングや食事制限などします。そうして何とかして目標を達成しようとしているのです。

クリスチャンもアスリートのように生きなければ、天国まで信仰を守り抜くことはできないのです。ただ何となくクリスチャンとして生きているだけでは、生涯の最後まで信仰を守り通すことはできないのです。生涯の最後まで、信仰を守り通すことはそんなに簡単なことではないのです。多くの人を救いに導いたパウロでさえ、信仰の失格者になる危機感を持っていたのですから。

私たちはまず、生涯の最後まで（天国に行くまで）信仰を守り通すことを、人生の目標にしなければなりません。そのためには、アスリートのような努力が必要です。アスリートには、毎日決まった「ルーティーン」があります。クリスチャンにも、ルーティーンがあります。それは、①洗礼を受け、②毎日聖書を読み、③祈ること、④毎週礼拝を守り、⑤奉仕をすること、⑥毎月献金（月定献金）を捧げ、聖餐に与ること、です。私たちは、生涯の最後までこのルーティーンによって、自分の信仰を養わなければ、私たちの信仰は次第に枯渇し、迷い出てしまいます。これらに加えてパウロは、福音を伝えること（伝道）をルーティーンに加えました。それは、福音を人に伝えることで、自分も福音に留まり続けるためです。パウロは自分の信仰のためにも、人々に福音を伝えたのです。

おわりに

私たちは、大きな目標を掲げるのも大切かもしれませんが、まず生涯の最後まで（天国に行くまで）信仰を守り通すことを目標にしなければなりません。それは決して簡単なことではありません。毎日、毎週、毎月のルーティーンによって、自分の信仰を養わなければ、決してできないことです。私たちはこれまで、何人も信仰から迷い出た人を見てきました。とても信仰に熱心であった人でさえ、信仰から迷い出てしまうのです。

私たちは、自分自身が福音に留まるためにも、人々に福音を伝えなければなりません。「キリストの律法」から決して離れずに、世の中に入り、世の人々と共に生き、信頼関係を築かなければなりません。それは、一人でも多くの人を福音によって救うためです。

しかし私たちは一方で、イエス・キリストの約束にも耳を傾け、信じなければなりません。「わたしは彼らに永遠のいのちを与えます。彼らは永遠に、決して滅びることがなく、また、だれも彼らをわたしの手から奪い去りません」(ヨハネ 10:28)。